



# カレッジ情報2015

2015. 11. 4(水) 11月号

発行：秋田県生涯学習センター  
tel: 018-865-1171



## 新鮮! 県美ゼミ (S1・2)

### 「藤田嗣治と平野政吉 まぼろしの美術館 1936～1938」

講師：県立美術館学芸員 原田 久美子 氏

講演(S1)では、前半で「まぼろしの美術館」となった「平野政吉家美術館(藤田美術館)」に展示されるはずだった藤田嗣治の作品を中心に、その画業を紹介していただきました。藤田の画業は5期に分けることができ、それぞれの時期の代表作について画風の変化が見られることや藤田自身の生活の様子などが語られました。

後半は「平野政吉家美術館(藤田美術館)」についての内容でした。「平野政吉は藤田嗣治以外のコレクションも含



めた美術館作りを目指し、藤田嗣治は自身の個人美術館を目指した形跡があったこと」「屋根がガラス張りの壮大な美術館で、『秋田の行事』は床から20センチ程度離れたところに臨場感溢れる形で展示される予定であったこと」などが語られました。

一週間後の現地学習(S2)で、講演を受ける形での展示解説とともに、平野政吉家美術館の模型を見ることができました。あらためて「まぼろしの美術館」が完成していたら…、と想像力をかき立てられました。



## 秋田市探訪 vol.4 (C6) 「秋田市新庁舎建設工事現場見学」

秋田市新庁舎建設室と清水・千代田・シブヤ・田村建設共同企業体の方々の協力により、秋田市新庁舎建設工事現場見学を実施しました。最初に、建設室参事小原氏から、現在の庁舎が三代目に当たり、それまでの歴史をお話しいただきました。「市制施行と同時に最初の秋田市役所が土手長町中丁の旧南秋田郡役所内(現在の北都銀行本店の地)に置かれていましたが明治38年に焼失してしまったこと」「その後明治42年に二代目市庁舎が土手長町上丁(現在の千秋矢留町：JA新あきた会館付近)に完成し、昭和39年まで使用されていたこと」



「現在の庁舎も業務拡大に伴って手狭となり、増築や既存ビルへ入居など分散してしまっていること」「四代目の庁舎は全業務を一体的な庁舎内で行えるように建設されること」を学びました。次に工事概要や完成予想の説明を受け、現場見学に向かいました。

内装が未完成で、無垢な状態の庁舎を見ることができました。この後、内装工事・備品搬入といったことが控えており、先の説明にあった完成予想も含め、将来こういう庁舎になるんだなと、とても楽しみな気持ちになりました。



カレッジ情報のバックナンバーは、秋田県生涯学習センターWebサイト  
<http://www.pref.akita.lg.jp/lifelong/>からダウンロードすることができます。

## パソコン入門「ちょっぴりできるコース」(K6・7・8)



今回は少し高度な内容でした。ハガキ裏面では、「透かしの設定(背景)」「テキストボックス(挨拶文)」「画像ボックス(干支などの図柄)」の活用を主に扱いました。風景写真などで背景を作り、「謹賀新年」を横書きテキストボックスで「平成二十八年元旦」を縦書きテキストボックスで、それぞれフォントの変更やポイント数の変更、ボックスの塗りつぶしの設定の解除や枠線の解除などを行ってみました。画像ボックスは少し大きめの画像を準備して、わざと失敗の上で文字列との配置関係、画像の拡大・縮小、などを体験してみました。パソコンでこのような操作がしたいと思った時、誰でもすぐにできるということはありません。操作本を読もうとすると、いろんな本があつてどれ

がいいか迷います。実演を見て、自分でやってみて、何度も失敗して、対処方法も含めて憶えていくのが、最良の道でしょう。操作しながら、様々な質問が飛び交い、「最初の頃は、私もこんな質問をしていたよね」とパソコンを始めたばかりの頃のことを思い出しました。『最初は誰でも初心者、経験は糧、年齢は関係ない。慣れこそ大事。』そんな言葉が頭に浮かびました。

## 発見!ミュージアムゼミ (T7) 「擬古文で読む菅江真澄①

～原文講読のすすめ

講師：県立博物館 学芸主事 松山 修 氏



平凡社東洋文庫の『菅江真澄遊覧記』全五巻が刊行されています。現代語訳で読みやすいのですが、図絵や歌、その前後の記述が省略されており、時には「面白いところ」まで省略されているために「味気なさ」を感じることがあります。一方、未来社の『菅江真澄全集』全十三巻や『秋田叢書』本編十二巻+別集六巻も刊行されていますが、こちらは真澄の原文を「翻刻」し、擬古文そのままの文体で、省略がありません。真澄の心の内を読もうとすると、『菅江真澄全集』や『秋田叢書』を読まざるを得ません。しかし、「翻刻」の過程で原文にない句読点や濁点が付加されているので、「翻刻」に疑問を感じると、原文を読むことになります。「くずし字の原文」を誰もが判読できれば最

も良いのですが、多くの方が翻刻に頼ることになります…。

実例を示しながら、『菅江真澄全集』や『秋田叢書』を一度は読んで欲しいとの内容に、皆聞き入ってしまいました。

## 史料で紐解く秋田の歴史 (B4) 『絵図史料』と秋田藩の歴史

講師：県立能代高等学校 教諭 太田 研 氏

江戸幕府は日本全体の絵図作成を目的に各藩に国絵図の作成を命じました。それは寛永期・正保期・元禄期・天保期の4回ありました。寛永期は準備段階といえるもので、正保期のものが正式なものと考えられますが、各藩の境界がはっきりしていなかったこともあり、幕府の方でつなげてみてうまくつながらないことから間違いがあることがわかったようです。そこで、元禄期の国絵図作成に当たっては、国境を確定させよとの命令もありました。ところが秋田藩では、南部藩との国境を「森吉山」と記述し続けており、長らく誤りに気づかなかつたのです。原因は実際に現地を確認すること無く絵図が作成されたことにあったようです。享保期に測量技術が発達し、「測量基準となる山を報告せよ」との幕府からの命令でようやく秋田藩も誤りに気づいたのでした。天保期になってから正確な国絵図が作成され、幕府に提出されました…。



県公文書館に保存されている国絵図は「幕府に提出した絵図の控」ですが、その大きさ故に実物を閲覧することはできませんでした。県公文書館では平成25年度に絵図史料のデジタル化事業を実施しており、太田氏が担当でした。最後の「ぜひ、閲覧端末で今日の話を確認いただきたい」との言葉に、「これは見に行かなければ」と誰もが思ったことでしょう。